

小屋名しょうけ と 大橋用水

Koyanasyouke to Oohashiyousui

語り手 森 久治
聞き手 山本真紀

企画 高山市
取材日：令和5年1月18日

「小屋名しょうけ保存会」誕生

たまたま小屋名の区長をさせてもらったら、「小屋名しょうけ保存会」を作りました。保存会を作るきっかけは平成8年11月のまちづくり懇談会です。町役場の人4人と小屋名の役員と一緒に文化の伝承やまちづくりについて話しました。座談会ですね。

その場で、伝統ある「小屋名しょうけ」を作る人がおらんようになってきたから、今のうちに技を習って、後継者を育成したらどうかって話が出て、保存会を作ることになりました。

その時分ね、「小屋名しょうけ」を作ってみえる人は、1人か2人しかみえなかったの、わしらより先輩の方々の方が良からずということで、「小屋名しょうけ」を作っているところを見たことのある方々にも保存会に入ってもらったんです。保存会では、久々野町から補助金をもらって法被を作ったり、のぼり旗を作ったり、ビデオ映像を作ったりしましたね。保存会を始めた時は12、3名の会員がいましたが、今は保存会を作った時のメンバーは、ほとんど亡くなってしまって生きているのは3人だね。

小屋名の工夫 ～材料から道具まで～

昔、小屋名は田んぼが少なく畑が多いため、男衆の出稼ぎが多かったって言いますな。しょうけ自体は、江戸時代の中頃に福井の方から習ってきたって本に書いてあります。

伝わったばかりの頃のしょうけは、ササで作られていたんじゃないかと思います。ただ、ササは節があるので綺麗な筥にならん。「小屋名しょうけ」は、スズタケで編んで、枠はツタウルシやヤマウルシ、縁はマタタビを使っていますが、やっぱりスズタケはいいですね。素直で加工もしやすいです。どうも福井にはスズタケはないようなので、小屋名で工夫してスズタケを使うようになったんだと思います。スズタケは3年物が一番良く、水の下がる時期に採りに行きます。だいたい11月頃です。前は、付知まで行きよったんですが、少し前に竹の花が咲いて枯れてしまったので、今は木曾の方まで採りに行っておるんです。

本によると、「小屋名しょうけ」は、養蚕が盛んな時は桑を入れるのに使っていたらしいですな。今は、水切りに使います。餅屋さんも餅米の水切りは「小屋名しょうけ」じゃないと、と言われますし、寿司屋さんもどうでも「小屋名しょうけ」は必要と言われる。もしかしたら、スズタケのひご1本1本をかまぼこ型に加工したのも、米の水切りを想定しておったのかもしれないな。

スズタケを割る「タケワリ」、小割りにしたタケの表面を削る「ヨコダケヒキ」、マタタビを四つ割にする「マタタビワリ」などしょうけを作る道具も普通の鎌などを加工して、工夫して作ります。



森 久治
昭和10年7月17日生

プロフィール

久々野町の小屋名で生まれ、大西中学校を卒業した後、農協に勤めた後は、9年9カ月久々野町議会議員を務める。

「小屋名しょうけ」講習会

保存会では、毎年「小屋名しょうけ」の講習会をやっています。久々野の人には募集チラシを配ります。その他に広報たかやまでも募集します。反響があって結構、応募があります。小屋名だけじゃなく、よそからの人もようけ参加してくれています。20人限定でやるとるんやけど、今年は25人くらい来てくれとる。講習会に来てくれた人には「保存会に入ってくれよ」って言っています。

講習会は10月から3月まで、10回。講習会に来る人にも山に材料を採りに行ってもらい、材料作りから始めるので時間がかかるんです。簡単そうに見えるんやけど、しょうけを編みかけるとコツがいるんです。奥が深いんですね。沼みたいのにめりこんでいくんです。だから何年も継続して参加される方が多いですね。3年4年と続けて講習会に来てくれる方もいます。



小屋名しょうけ

つないでいきたい伝統

二十四日市が近くなると品評会をして、値段を付けます。昔からずっと二十四日市には出ておりますが、今でも喜んで待ってみえる人もいます。今回の二十四日市は、コロナ前みたいに歩行者天国でやると聞いておりますから、賑わうんじゃないかと思えますね。個別の注文もあります。よそのお餅屋さんからも注文が来るとるんです。カネの筧とかプラスチックの筧とかあるけど、やっぱり水切りにはしょうけが良いですから。

皆さんが「小屋名しょうけ」を喜んで使っていただけるので、これからも続けていけると良いね。保存会を継いでくれる人がいるのは、本当ありがたいね。久々野まちづくり協議会が、講習会の段取りをしてくれるのもありがたいね。当初は小屋名地区だけで保存会を作ったんですが、今は「小屋名しょうけ」を残していけるといいなと思います。これからもなんとか「小屋名しょうけ」を続けていってほしいですね。



二十四日市での実演販売

大橋用水の歴史

大橋用水は、高山市の史跡です。全長6キロありますね。わが家は、代々「久次」という名前だったのですが、その5代目の「久次」が中心になって大橋用水を引きました。

今なら重機があるけど、当時はみんな人の手の作業です。本当に6キロも上流から水を引くなんて出来るのか。また、用水の土地は人の土地なもので買い取りしんとならんで、お金はどうするのか。当時は周りの人から「そんなことできるか、馬鹿のたわけの」などと言われたこともあったようです。

昔、小屋名には田んぼがなかったんです。ここは山からの水も来ず、全然水が無く田んぼを作れなかった。年貢は米で納めると割が良かったんですが、田んぼがない状態でした。そこで、5代目の「久次」が、高山の儒学者の赤田臥牛先生にどうしたら田んぼが出来るか相談をして、用水を作る決心をしました。それでまあ、なんとかして用水を作りたいということで、部落の皆さん方に寄っていただいたけど、なかなか話がまとまらなかったとい

うことです。だいぶん反対されたいらしいですな。小作の人達は、この用水が自分達の為になるとは思わなかったんでしょう。

それでも久次はどうでも用水を作りたかったらしく、前からだいたいの図面を作っておって、小瀬や見座の土地を買収しとったらしいです。それで、穴を掘り始めたけど、なかなか固くて掘れなかった。それで、富山の方から人を連れてきて穴掘りをしたということです。トンネルが何カ所もありましたし、決意してから完成までに30年くらいかかったそうですな。久次の連れ合いが先祖代々の土地やけど、その土地を提供すれば、なんとかなるんじゃないかと言ってくれたそうです。元々、わが家は大地主だったのですが、大橋用水を引く為に多くの土地を売ったみたいです。

歴史を残し、伝える

大橋用水の歴史は、久々野の子ども達が劇をしてくれたり、久々野町の教育委員会がスライドを作ってくれたりしました。浪曲仕立てにして、小屋名の人が語っているところを録音したカセットテープも残っています。今でも、毎年、久々野小学校の子ども達に神社のことや大橋用水のことを説明させてもらっています。

昔、消火栓がない時は防火用水も兼ねてましたし、生活用水も兼ねていました。今でも、大橋用水の水は、米を作る為に大事な水なんです。先祖が用水を作ってくれたことを本当に感謝しております。まあ、そのおかげで皆さんに迷惑をかけたこともあったかと思いますが、私は誇りに思っております。



大橋用水